

『If you are happy and』

樋口ミユ

はじまり

イタコがじやらんとギターを鳴らした。

1964年生まれやねん。東京オリンピックの年やねん。知らんけど。なんで知らんねん、いわれても、生まれた時から、あほやったから、知らんねん。一番はじめの記憶はあれや。あれ。まあええわ。

1964年いうたら、あれね、ケネディ殺されたりね。いやそれ1963年やな。ちよこれええとろってえ、か。オロナミンCで知ってるか。

3Cや。

一番初めの記憶はあれや。あれ。まあええわ。

じやらんとまたギターを鳴らした。

車カー、冷房クーラー、テレビカラーテレビ

3Cや。

かせつとてーふれこーだー、やな。

ほんでムカデやなくて、ゴキブリやなくて、コウロギやなくて、かぶとむしな。飛んで来たな。

リカちゃんの足のとこなめたら苦いで。

郵便番号もできて、オーモレーツ。

まいにちまいにちぼくらはてっばんのお、
一番初めの記憶はあれや。あれ。まあええわ。

じやらん。

こーど経済せーちよー言うて、

まっただなかや。

すごいやろ。

ぜんぶパソコンで調べてん。

知らんねん。

何も憶えてないわ。

知らんうちに、またもいつかいオリンピックくるて、
いつの間にや。

あほやからな。憶えてない。

一番初めの記憶はあれや。あれしか、憶えてないわ。あれ。あ、もうええか。

じゃらん。

ほな、始めるで。

じゃらん、じゃらん。

イタコはギターを鳴らし始めた。

風景1

何もない部屋。

彼女が座っている。

音楽が聞こえる。

ギターの音。

彼女は顔をあげる。

しあわせなら手をたたこう

とは歌わずに、

ハミングとギター。

だけどたぶん誰でも口ずさめる。

しあわせなら手をたたこう。

そのギターとハミングは、

イタコが奏でている。

その音を、聞きながら、

彼女はゆっくり、

ゆっくりと、

椅子から立ち上がる。

そしてたった20メートルかそこらの短い距離を、

彼女はまるで永遠のように歩き続ける。

ほんの十数歩の足取りは、

まるで宇宙が生まれてから今までの時間をかけるように、

ゆっくりと、

ゆっくりと。

彼女は歩く。

そのたった十数歩のさなかに、

ギターを抱えたイタコの口伝の歌を、

聞いているのだ。

登場人物

笑う男

待つ女

大家と赤子

在宅兵士

船頭である姉

マネキンである愛人

ギターを抱えたイタコ

しあわせなら手をたたこう。
ギターの音とハミング。
イタコが大きく息を吸った。
まるで大声で歌い出すみたいに、
大きく、大きく、
息を吸う。

吐きだされた音は、
笑い声。
イタコの声ではない。

あははははは
はははははは
あはははは
愉快なのだろうか
幸せなのだろうか
可笑しくてしょうがないのだろうか
あははははは
はははははは
あはははは

笑う男が立ち尽くしている。
大口開けて笑って立ち尽くしている。
笑って、笑って、笑って、やがて、

男、手に持っている玩具のボタンを押した。
軽快なリズムが聞こえる。
しあわせなら手をたたこう
あの軽快なリズム。
男、笑いながらしばらくそのリズムを聞いている。
やがて、

男 ああ、悲しいな。

それでも男の笑声は止まらない。
乳飲み子を抱えた大家が笑う男を見ている。

大家 あんた、悪いんだけど。

男はニタリと大家を見た。

大家 早々に出ていってもらえない。

男 唐突です、大家さん。

大家 下の部屋から苦情が来てんだから。

男 くじよ、

大家 うるさいよ。毎日毎日、何がそんなに面白いの。

男 面白くも可笑しくもありません。

話ながらも男は始終笑い続ける。

大家 なのに笑うのかい。

男 はい。だから困っちゃって。

大家 いますぐ出ていくか、いますぐ笑いをとめるかどっちかにしな。

男 大家さん。

大家 騒音殺人が起きてからじゃ遅いんだよ。

男 すみません。

大家 なに笑ってんだ。謝るなら反省の片鱗くらい見せな。

男 大家さん。僕だって笑いたくはないんです。

大家 なら笑うな。

男 止まんないんですよ。

大家 バカにしてんのか。

男 そんなつもりは、

大家 笑いは瞬発力なんだよ。一瞬の花が咲いて散るのが笑いだよ。それをダラダラゲラゲラ笑ってんじゃない。これはもう騒音。イヤガラセだよ。

男 違います。

大家 笑うな。

男 はい。笑いたくはないんです。

そのわりには、

あっはっは。

あっはっは。

男は幸福の絶頂のように笑う。

大家 ならタオル噛め、噛んで押し殺しな。

男 すみません。だけど、けどね、大家さん、

大家が差し出したタオルを男は噛みしめる。

大家 けどどやっぱりスマイルが一番でしょう、とか言うんじゃないよ。

男、そんなつもりはないと言いたいのだが、

大家は言葉が続ける。

大家 笑顔の押し売りはやめな。不愉快なんだよ。あたしの知り合いでいつも笑顔が一番って言ってた子がいるけど、その子笑顔のままDVの内縁の夫に殴り殺されたわ。笑顔が笑顔を連れてくるなんて嘘だね。DV男の内面までは笑顔に出来なかったんだろ。別れりゃいいのに出来ないのがこれまた人間じゃないか。苦しい時は苦しい顔したほうがいいし、むかついている時はムカついた顔したほうがいいんだ。腹ん中とツラがあべこべだからストレス溜まるんだよ。しあわせだから笑うんじゃない、笑うからしあわせになるんだ、とかイイ話なんかするんじゃないよ。顔が腫れ上がって青紫なのに笑ったままの死体と対面した時のあたしの気持が分かるかい。痛かっただろうって、悔しかっただろうってなんであたしが代わりに泣かなきゃならないのさ。ちよつとティッシュ。

男、思わず自分の口からタオルを引っこ抜いて渡そうとするが、

大家 その優しさはいらない、ティッシュだよ。

男は床に無造作に置かれたティッシュを渡す。

大家 笑顔がいいなんて誰でも知ってるよ、ならなんで声がかいクレマーのほうの意見が通るんだよ。笑顔が武装解除のひとつなんて言うんじゃないよ。どれだけの人間がその笑顔ぶっ放されて死んでいったかあんた知ってるか。ニコニコしてる子どもが聞き分けがいいなんてもう誰も信じやしないよ。どうせ成人したら恋人との関係がうまくいかなくて、カウンセリング通って、遊ばいい子にしていた少女時代のこと掘り起こされてトラウマとか言いだすんだよ。子どものほうが頭がいいんだ。どの顔すれば大人が歓ぶか知ってるから笑うんだよ。生まれたらサバイバルの始まりだからね。生き残るために笑うんだよ。あああたしもいろいろあったね、話すと長くなるけど聞きたいかい。

男は、結構ですと言いたいが大家はおかまいなしに話題を変える。

大家 外すな囁んどけ。話かわるけど、あたしは最近もうネットもニュースもシャットアウトしたね。もうね、自分が見たことしか信じないんだ。世界が狭いがそれがどうした。あんた、触れも出来ない画面の向こうのものを本当と信じるほうが気が狂ってわ。それが正常な情報かどうかなんて誰が判断できるんだよ。どうせ人間、最後は自分が見たいものしか見ないんだから。視野は360度じゃない。首がくるっくる回るフクロウじゃないんだから。情報ってのを両手いっぱいぶらさげて、右往左往するくらいなら、触れられる世界のほうがよっぽど広いね。どうせ世界は陰謀だらけだよ。NASAとCIAとイルミナティのね。

男 それもなにかの情報じゃないんですかね。

大家 ハリウッドだよ。

男 映画はいいんですか。

大家 真実はもう虚構の中にしかないんだよ。

男 大家さん。

大家 ナンだよ。

男 手、叩けますか。

大家 しあわせなら、つてやつかい。

男 はい。

大家 叩かないね。あんたこれともとスペイン民謡だって知ってる？

男 はい。

大家 ほんで歌詞つけたときに何がヒントになったか知ってるかい。

男 いえ。

大家 くらっぶゆあはんずだよ。神をたたえよって聖書にあるんだ。旧約聖書の詩編㉙・1「すべての民よ、手を打ち鳴らせ」九ちゃんなんであの飛行機乗っちゃったんだろうね。

男 大家さん博学ですね。

大家 ウィキだよ。

男 それ安心ならない情報じゃないんですか。

大家 しあわせになろう、しあわせになろうって気持ちやしあわせを運んでくるんだってことはあたし信じないね。本屋に行きな。そんなしあわせ引き寄せ術の本がわんさかと並んでるね。そんなもんでも読まなきゃならないほど無知なやつらが多いせいだね。あ。

大家、窓を見た。

大家 今、また飛んだね。

流れ星のように、飛んだ。

大家 だから外すんじゃないよ、話の続きを聞きな。うまくいかないって項垂れて足の爪見てるやつらがひっかかるんだよ。そんなことは昔っからハウス食品のポリアンナが教えてくれるよ。あたしは手はたたかないよ。なぜならあたしは生まれた瞬間からしあわせだから。叩いて示す必要ないね、あたしがいるだけで充分だ。

男 大家さん。

大家 ナンだよ。ニタニタ笑うんじゃないよ。

男 僕は、しあわせは分かりますが、今はそうではありませんよ。

大家 なおさら笑うんじゃないよ。

男 はい。僕も、本当に、笑いたくはないんですよ。

大家 笑いたくないの？

男 はい。

大家 じゃナンで笑ってるの。なるほど。ならそれは、

男 はい。

大家 ほうれい線対策で頬の筋肉を鍛えてるってわけだね。

男 完全に違います。

大家 あ。

大家と男、また窓を見た。

キラキラと、何本かの光線が見える。

しばらく見つめる。

やがて大家はゆっくりと男に向きなおり、
タオルを噛んだ男を見る。

大家 ナンの話しに来たんだったっけ。美容の話？

男 いえ、

大家 ハウス食品の話？

男 いえ、

大家 ああ、家賃値上げする話だ。

男 違います。僕の悲しみの話です。

大家 そうだったっけ。

男 結婚したんです。

大家 ある意味悲しみの話だね。

男 出来てしまったんで。

大家 そりゃ逃げられないね。

男 何か月ですか？

大家 ああ、うちのかい。そろそろ1年かな。

男 いりますか。いろいろあるんで。

大家 え？

男 買いそろえました。いろいろ。

男は部屋の中を見やる。

赤ちゃん用のイロイロが。

ごろごろと転がる。

男 まだ生まれる前から。僕らは気が早くて。

大家 誰でもそんなもんだよ。

男 全て用意しました。おむつ。おくるみ。おもちゃ。マット。ベッド。空気清浄器。哺乳瓶。いろいろ、いろいろ、いろいろ。女か男かも分からないうちから。肌着を何枚も買いそろえて待つ。やってるのが当然のように、買いそろえていくんです。妻が80センチのロンパースを買った時には、さすがにそれは早すぎるよと言いました。だってね、準備を始めると未来がやってくるんですよ。まだ見ぬ風景が生まれるんです。まだどこにもないのに、もうあるんです。

大家 あんたと嫁の頭の中にだろう。

男 はい。それはもうなかったことには出来ないんです。想像してしまっただから。

大家 で、だいたい想像と現実はずれるのが相場だね。

大家は部屋の中を見た。

大家 匂いがしないね。

男 はい。

大家 新生児には匂いがあったね。

男 そうなんですか。

大家 乳児には乳児の匂いだね。

男 そうなんですか。

大家 幼児には幼児の匂い。大人にも匂いがあるだろ。年数たつと人間も発酵するのか熟すのかね。だいたい大人は臭いね。

男 出来婚なんで、安定期に入ってからあらためて新婚旅行に行きました。

大家 あんたの悲しみの話の続きかい。

男 楽しくてね。もう、本当に楽しくて。彼女と出会ってからね、何をしても何をしなくても楽しくて、旅行の間中、ずっと笑っていました。

大家 悲しい話なのかい、楽しい話なのかい。

男 新婚旅行は笑えばなしの旅でした。それでね、そこでね、笑っている真っ最中に、

あは。

笑う男が笑う。

大家 タオル。

慌ててタオルを口に噛む。

男 笑ってる真っ最中に、車が歩道に突っ込んできました、

タオルを噛んでいても、笑い声は漏れる。

男 ドカンドカんで、あっという間で。ガードレールがあったのにね。ガードの意味なくドカンでね、何をどうしたら安全かなんて言い切れませんよね。だってね、並んで歩いていたのに僕は、

男 僕は、擦り傷だけでした。

大家はだだっぴろい部屋を見渡した。

大家 嫁は？

何もない。

男はまた大きく笑いだした。

大家 この玩具とロンパースを使うはずだったアカンボは？

男の笑いは止まらない。

大家 あんたねえ。

大家は男を見た。

もちろん、男は笑っている。

大家 それ、笑いながらする話じゃないだろう。

ふつりと、一瞬笑いが途切れたような気がしたが、気のせいだろう。

大家 運転手は？

男 へこんだ車とともに逃走しまして、

大家 なら警察行け。

男 行きましたよ。

大家 そんなでそいつ探し出して腸引きずり出しな。

男 それやったところで彼女とまだ見ぬあの子は戻りますか。あ。

男と大家、窓を見た。

流れ星、

光線、

あるいは、

火花かと思われるような、

砲弾の弾道が見える。

大家 戻らないね。

男は大口開けて笑った。

慌てて口にタオルを突っ込む。

大家 あんた、ほんとに悲しいの？

男 はい。僕、悲しいんです。

男 はまた、玩具のボタンを押した。

リズムが聞こえる。

けれど男はまた笑う。

男 ああ、悲しいなあ。

男 は笑う。

男 悲しい。

男 は笑う。

男 悲しいんです。

大家 だったら笑うんじゃないよ。

男 楽しくて、本当に楽しくて、毎日笑って、その真っ最中だったから、突然に、唐突に、スイッチを切ったみたいに、奪われてしまって。だったら準備している間に生まれた想像の未来までも奪っていけばいいのに。僕だけが、そのまま、一時停止です。マヒしてしまつたみたいで、笑いが止まらなくなりました。

女 は？

男 僕だけが止まっています。止まってるんです。

女 なら病院行け。

男 行きました。「異常ナシです。ショック状態が続いているんでしょうね。事故の後遺症です。時間をかけて焦らずに」病名は何かつけられたようですが、笑いすぎて忘れちゃいました。とまっているのに、ねえ。時間をかければイロあせますか。僕らが想像したあれこれの未来の風景までも。これ、

男 はポケットから紙切れを取り出す。

新聞の切り抜き。

大家 はそれを見る。

大家 4月7日未明新婚旅行先で車に轢かれ……新聞の切り抜きがどうした。

男 僕らはこんなに小さいんです。こんな2000字の文字の中に入るほど小さいんです。
大家 あ。

大家はまた窓を見た。

大家 小さいもデカイもないだろう。

ただ沈黙が流れる。

大家 あ、思い出した。笑いの騒音止めなきや出てってもらったんだ。

男 止まっているから止められないんです。

大家 あんたその話であたしの同情引こうって思ったんなら申し訳ないけどスルーするよ。
イロイロあるね。あるんだよ。それいちいち受け入れてたら家賃業なんてやってられない。

男 探しに行きます。そしたら、この不釣り合いな笑いが止まると思うので。

大家 運転手を？

男 いえ。

大家 嫁を探すなんて言わないだろうね。会いたいなら恐山に行きな。イタコが少しズレた世界平和を唱えてくれるよ。

男 僕です。

大家 あそう。

男 はい。

大家は男を見た。

大家 今なんだった？

男 しかめつらの、僕を探しに行きます。

今度は大家のほうが出した。

大家 あは。

大家 あははははははは。いるじゃないの、そこに。もうあたしが見つけたよ。

男 この僕じゃない。

大家 どっちだよ。

男 泣きたいんですよ。

男 ちゃんと泣きたい。消えてなくならない想像した未来が色あせて流れていくように。もう僕の記憶の中にしかない彼女とまだ見ぬあの子の笑い声が色あせて流れていくように。涙を流したい。

大家は笑うのをやめた。

男 彼女と出会う前の、しかめっ面の僕を探しに行きます。そうしたら、思い切り、泣けるでしょうから。

男は笑いながら言う。

笑うたびに、タオルを口にはおりこみ、

笑いたくない笑いかみ殺す

そのかみ殺す声が、笑い声が。

いつのまにか泣き声のように聞こえるかもしれない。

男 だから。

男 しばらく留守にしますから、

男 静かになると思います。

男 帰ってくるころには、

男 もう笑っていません。

男 家賃は払います。

男 だから、

大家 アテはあるのかい？

男 ないです。

大家 なら、

男はニヤつきながら大家を見た。

大家 アマゾンに行きな。

男 アマゾン……

大家 箱にスマイルの中には何でも入ってるだろ。

男がふと足元を見ると、

箱にスマイル。

笑っている。

男は箱を覗き込む。

男 ありますか。ここに。

大家 なけりや他のどこにもないだろうね。

男は箱にスマイルを見た。

同じように、男の口が笑いで跳ね上がる。

男 冗談ですよね。

大家はにやりと笑うだけ。

ドン。

砲弾の音がする。

大家 今日タオルを外すんじゃないよ。明日また笑い声が聞こえたら出ていってもらうからね。おやすみ。世間は布団に潜り込むおねむの時間だよ。

大家は乳飲み子を抱えて、階段を降りて行った。

男は、また玩具を鳴らす。

しあわせなら手を叩こう。

リズムが聞こえる。

男はタオルを噛みしめて、
笑いを殺す。

足元の箱にスマイルを、じっと見つめる。
じっと。

じっと。

男は箱にスマイルを見た、

男
スマイル。

今度は自分の両手を見た。

男
叩けない。叩けないなあ。

笑ったまま。

おもちゃを片手に、

男、箱の中にゆっくりと足を踏み入れた。

箱にスマイル。

男が足を踏み入れ、

スマイルのトンネルを通る。

ゆっくりと歩く彼女は、
床に転がったロンパースを拾い上げた。
それさえも、
永遠のようにゆっくりと。

箱にスマイルのトンネルを抜けると、
大きなモニターの前に座る若い男がいる。
モニターには密林が見える。
アマゾンなのか？

緑の木々に戦闘機の影が映る。
無数の影。

緑の上を走って行く。
ぼんやりと、笑う男はそれを見ている。

在宅兵士 あ。

男 あ。

在宅兵士 おはようございます。

男 あ。

在宅兵士 食べます？

在宅兵士はオニギリを男に突きだす。
モニターからは視線を外さずに。

在宅兵士、淡々と。

淡々とおにぎりを食べ、

フォークでポテトを突き刺して口に運ぶ。

男 あ、いや。

在宅兵士 今日、山田さんと僕の二人勤務体制です。

男 あ、そう。

在宅兵士 あ、そうか。山田さんはお弁当ですよね。いいなあ。既婚者。って言いながら別に本気でいいなあとは思ってないんですけど。

男 ……鈴木くん。

在宅兵士 はい。

男は在宅兵士の隣に座る。

男 異常ない。

在宅兵士 ないですね。あってもいいのにな。山田さん。

男 ん。

在宅兵士 その顔、なんかの後遺症ですか。

男はタオルを噛みながら、笑いそうな自分の顔を必死で留めている。
勤務中だということを意識して、にやける、笑える顔を押しさえこもうと、
留めている。

男 あ、気にしないで。

在宅兵士 出ますよね。後遺症。

男 は。

在宅兵士 自分、在宅勤務だったんですけど、通勤するように申し出たんです。

男 あ、鈴木くん、いつ入隊だったっけ？

在宅兵士 あ、僕、入隊じゃなくて派遣なんです。在宅派遣登録兵士。

男 ああ。

在宅兵士 高校でNo.1って呼ばれてたんです。

男 え、何の？

在宅兵士 自分、ゲーマーなんです。

男 あ、

在宅兵士 ゲーマー選手権で地方代表になって、全国大会行って一等賞とって、指さばき。
ワザの繰り出し。もうね、職人の域。で、スカウトきて。山田さんはなんで？

男 あ、僕はハローワークで。

在宅兵士 へえ。ネットで見つけたって人もいたなあ。

男 それはいくらなんでも嘘でしょう。

在宅兵士 ホントらしいですよ、知らないけど。

男 大学行かなかったの。

在宅兵士 お金ないし。スカウトきたし。僕、動体視力が異様によくって、あ、ハエ。

フォークでハエを突き刺す。

男はフォークの先をオドロキの目で見る。

在宅兵士 あ、僕、小学校のころのあだ名はムサシミヤモトなんです。

男 なんてひっくりかえすの。

在宅兵士 野球でもやってればもうメジャーだったのかなあ。でも過去には戻れないです
から、やり直し効かないし、ていうか野球嫌いだし。サッカーでも良かったかな。でもス
ポーツ嫌いだし。なんでみんなあんなにサッカー好きなんだろうね。誰かが代理戦争だ
って言ってたけど、ならほんとに代理しちやえばいいのにな。あ、ヒット。

男 え、今、何か見えた？

在宅兵士 あそこの木の茂み。

男 え、相手が誰なのか判断した？

在宅兵士 銃、構えたんで。

男 え、それ見えたの？

在宅兵士 はい。

男 え、今？

在宅兵士 はい。

男 駄目だよ、勝手に撃っちゃ。僕も確認して、コンピューターでデータ認証してからじゃないと。本当に銃構えたのかどうか1人で勝手に判断しちゃ駄目だよ。

在宅兵士 でも見えたんで。

男 確認を、データ認証を、

在宅兵士 でもキカイは判断できないから、最終的には僕らが判断するんですよね。だったら大丈夫です。僕、動体視力異様にいいんで、間違いないです。

男 間違いないって、

在宅兵士 認証する手間はぶけましたよ。

男 でもね、鈴木くん。

在宅兵士 仕事の効率あがってるはずなんですけど。

男 だけど、

在宅兵士 だけど。

男 え。

在宅兵士 こんなことするために僕はいるんじゃないって思う時があるんです。

在宅兵士、黙ってモニターを見ている。

男 鈴木くん。

在宅兵士 すいません。見えてるここがどこなのか、僕、わかんないんです。わかんないまま、コントローラー操作して、監視して、オニギリ食べて、夕方5時になったら勤務が終わってモニターを自動監視システムに切り替えて飲みに行くんです。僕の部屋がどこか遠い戦場にアクセスしてるのに、でも僕の部屋はコカ・コーラの匂いしかしない。僕、全く死ぬ心配ないんですよ。だったらスカウトに乗ってもいいよって母親が言ってくれて、効率いいし、9時5時なんて他にないし、でも。

在宅兵士、初めてモニターから視線を外して男を見た。

在宅兵士 最近、勃たなくなってる。

男 え、あ、

在宅兵士 在宅だから、ひとりで朝から夕方までっていう環境が駄目なのかなって、出会いもないし、で、通勤に切り替えてみたんですけど、

男 うん。

在宅兵士 でもやっぱり勃たなくって。というか、もう、そんな気も起らなくて。というか、もう、どこ見ても、何見ても、どこもかしこもモニターの向こうみたいで。

男 鈴木くん。

在宅兵士 山田さん、チョコとタバスコと一緒に食べたみたいな顔してますよ。どうですか。

男 は。

在宅兵士 僕は、どうですか。どんな顔してますか。

男 うん、そうだね、うん。ええと、

男は在宅兵士をじっと見る。

男 中と外が、一致してると思うよ。

在宅兵士 山田さんて、いつもそんな妙な顔してモニター見てましたっけ？

男 や、違うな。今までは、

在宅兵士 もっとイカツイ顔でしたよね。

男 うん。

在宅兵士 こう、眉間にしわがもつと、

男 うん。あのね、鈴木くん。その、眉間にしわの僕を見かけなかったかな。

在宅兵士 は。

男 あ、えとね、どんな時に、僕はしわ出てたかな。

在宅兵士 だからいつもです。

男 違うんだなあ。そういうことじゃなくて。

在宅兵士 山田さんも、後遺症ですかね。

男 そうだね。

在宅兵士 生身の傷は、ないのに。

在宅兵士をじっと見ていた男は、

在宅兵士の指先から、そっとコントローラーを外した。

男 鈴木くん、大丈夫？

外してもなお、在宅兵士の指先は空で、

コントローラーを操作する。

在宅兵士 ボタンを押すと、あれ、爆破しているのは僕の精子なんだなって思うんです。あれ、爆破しているのは僕の体なんだろうなって。乾くんですよ。白くなるっていうのかな。暗闇ならいいのに。湿っていいばいばいのに。でも乾いて白くてパラパラしていく。すいません。僕今ワケの分からないこと言ってますか。しょうがないか、生まれた時からこんな世界だし、結構楽しくやってたんですけど、パラパラするんです。僕の指先。乾いて死んだ精子みたいに。ああ、どうしよう山田さん、指がパラパラ、崩れていつてる。止まりませんか、これ、パラパラパラバチバチバチバチバチバチ当たってるのかな、ああ、なくなつて、指なくなりました。どっかに落ちてませんか僕の指。あ、あそこ。

在宅兵士が、ないはずの指を刺す。

在宅兵士 山田さん、捕まえてください、僕の指。

男は、思わず伸ばした在宅兵士の指先を掴む。

在宅兵士 そこじゃないです。あっち。

男 でも、

在宅兵士 あ、走り出した。

男 指が！？

在宅兵士 掴まえてください、お願いします。あ、中指が、あそこに、あれは小指だ、飛び跳ねた、親指、天井に張り付いてる。ああ、ああ、ああ、ああ、

どこにもなにもないただの空中を暴れまわる在宅兵士。

男 す、鈴木くん、

在宅兵士 ああ、ああ、ああ、

在宅兵士の伸ばした指先をもう一度男が捕まえて、

男 指はあるよ。鈴木くん。

在宅兵士は乱れた呼吸を整える。

男 鈴木くん、休もう。そういう時は休養、旅、いいよ、旅にでも出るのがいい、うん。
在宅兵士 火星にでも、行こうかな。

男 でも、あれ、戻ってこられないのが条件だよ。

在宅兵士 知ってます。

男 審査にでも通ったの？

在宅兵士 山田さん。

男 ん。

在宅兵士 本気じゃないですから。

男 うん、そうだよね。

在宅兵士 山田さん。

男 ん。

在宅兵士 僕、全部なにもかもすぐに吹っ飛んで終わると思ってたんです。どうせ終わるって思ってたんです。

男 うん。

在宅兵士 でも、終らないんですね。僕は掠り傷ひとつもないから、終らないですね。ここから飛んでいくだけだから。

在宅兵士はモニターを見た。

そこには密林。

入り混じって人々が行きかう交差点。

在宅兵士 好みのタイプの女の子のデータを入力したら、半径20メートル以内で検索かけてくれるアプリがあって、ガールハンターってやつ。あ、この精密タイプ、僕仕事で使ってるなって。鳥。

男 え、え？

在宅兵士 鳥、いなくなりましたね。見かけない。大通りの両側に規則的に丁寧に植えられ伸びてる銀杏の木は瑞々しくて変わりない。でも、鳥、飛んでいませんね。山田さん。

男、在宅兵士を見た。

次にモニターを見た。

あらゆる町、

あらゆる空、

あらゆる海の画面が、

切り替わり、切り替わり、目まぐるしく

風景をザッピングしていく。

男 あ、ほら、鈴木くん、これ、鳥、

指し示すが、
それは鳥ではなく、
戦闘機の破片かもしれない。
千切れた戦闘服かもしれない。
鳥でないことは、
確かだ。

男 じゃなかったね。

在宅兵士 今ね、ここにね、ヘンなのが来てね、

男 へ、へんなの？

在宅兵士 ああ、例えば、です。もっともっと先の、未来から来たような、肩にゴールドの紐引っかけて、ピンク色した軽薄な筏を引つ張る大女がやってきて、

男 鈴木さんのヘンなのって、そういうイメージなんだね。

在宅兵士 あり得ないこと並べただけです。例えばです。そいつがやって来て、嘘だろうっていうようなゴールドに彩られたボタン装置を持っていて、「これ押したら好きな時からやり直しが出来るよ」とか、うれしいこと言ってくれるんです。山田さんだったら、押しますか、

男は口からぼろりとタオルを落とし、

絶叫のような笑い声を上げ、

在宅兵士の質問が終わらないうちに、

大声で答えるのだ。

男 押しよ。

男の雰囲気を押されて、在宅兵士は引き気味になる。

男は我に返ってタオルを口にツッコむ。

男 あ、ああ、ああ、あれば、だけどね。

在宅兵士 でも、ないですからそんなのは。

男 うん、そうだね。

在宅兵士 分かっていますから。自分で決めたんです。野球のメジャー選手にも、ワールドカップのサッカー選手にも、なれたかもしれない可能性を捨ててここに座ってる。

男、片手に持っているおもちゃを鳴らした。

軽快なリズム。

男 鈴木くん。

在宅兵士 はい。

男 手、叩ける？

在宅兵士、リズムを聞いてみる。

在宅兵士 何ですか、それ。

男 あ、知らないなら、いいんだ。

チャイムが鳴る。

勤務終了のチャイム。

在宅兵士 あ、5時。時間ですよ、山田さん。

在宅兵士、やけにドライに帰り支度を始める。

男 あ、ああ、おつかれさ、

と、男が言いかけた時。

もっともっと先の、未来から来たような、肩にゴールの紐引っかけて、

ピンク色した軽薄な筏を引っ張る大女がやってきた。

その筏の上には、嘘だろうっていうようなゴールドに彩られた

ボタン装置を持っているマネキンがいる。

男 す、ずき、く、

筏を引っ張る大女は、

ハクシヨン

ハクシヨン

ハクシヨン

フィクシヨン

ハックシヨン

と、妙な掛け声を発しながら、

マネキンも同じように発しながら、

するする、地面を滑ってやってくる。

男
鈴木くん。

しかし在宅兵士は荷物を肩にかけ、
振り返りもせず、

「お疲れ様です」

と、軽やかに帰っていく。

君の言うところのヘンなのが来てるよ、と

言いたかったのだが、

男はタオル取ったために笑いが零れて話すことが出来なかった。

はははははははははは

やってくる軽薄な筏を見て、

男は笑う。

ゆっくりと歩く彼女は、
床に転がった小さな絵本を拾い上げた。
それさえも、
永遠のようにゆっくりと。

筏が地面を滑る。

潮の匂いはしない。

地面を滑る。

筏を引っ張る船頭は、

なにやら呪文めいた言葉を呟いている。

その呪文の合いの手はこのようである。

ハクシヨン、

ハクシヨン、

ハクシヨン

フィクシヨン

ハックシヨン、

マネキンが、絶妙にさしはさむ。

ハクシヨン、

ハクシヨン、

ハクシヨン、

フィクシヨン、

ハックシヨン、

ゆっくりと地面を滑る筏。

男は通り過ぎて行く筏をじっと見る。

あんまりゆっくりだから、

もしかしたら一瞬の出来事だったかもしれない。

あまりにも遅すぎて。

あまりにも速すぎて。

ハクシヨン、

ハクシヨン、

ハクシヨン

フィクシヨン

ハックシヨン、

呪文はきつとこんな意味だろう。

紙の船。
いつか沈む。
木の船。
いつか朽ちる。
コンクリの船。
いつか崩れる。
永遠の船。
沈まず朽ちず崩れない永遠の船。
それは嘘。
沈まない船は嘘。
朽ちない船は嘘。
崩れない船は嘘。
沈んで眠って目覚めてまた眠る。
朽ちて眠って目覚めてまた眠る。
崩れて眠って目覚めてまた眠る。
だから眠らない船は嘘。
眠らない紙は嘘。
眠らない木々は嘘。
眠らないコンクリは嘘。
眠らない町は嘘。
眠らない雨は嘘。
眠らない工場は嘘。
眠らない花々は嘘。
眠らない硝子は嘘。
眠らない川は嘘。
眠らない靴は嘘。
眠らない猫は嘘。
眠らない鍋は嘘。
眠らない風は嘘。
眠らない灯りは嘘。
眠らない石ころは嘘。
眠らない時計は嘘。
眠らない霊長類は嘘。
眠らない子どもだけが本当。

音声で聞くとこんな音だろう。

かみのふね
いつかしむむ
きのふね
いつかくちる
こんくりのふね
いつかくずれる
えいえんのふね
しずまずくちずくずれないえいえんのふね
それはうぞ
しずまないふねほうそ
くちないふねほうそ
くずれないふねほうそ
しずんでねむってめざめてまたねむる
くちてねむってめざめてまたねむる
くずれてねむってめざめてまたねむる
だからねむらないふねほうそ
ねむらないかみほうそ
ねむらないきぎほうそ
ねむらないこんくりほうそ
ねむらないまちほうそ
ねむらないあめほうそ
ねむらないこうじょうほうそ
ねむらないはなばなほうそ
ねむらないがらすほうそ
ねむらないかわほうそ
ねむらないくつほうそ
ねむらないねこほうそ
ねむらないなべほうそ
ねむらないかぜほうそ
ねむらないあかりほうそ
ねむらないいしころほうそ
ねむらないとけいほうそ
ねむらないれいちょうるいほうそ
ねむらないこどもだけがほんとう

しかし、実際に聞こえる呪文はこう聞こえるだろう。

か
る
み
る
の
る
ふ
る
ね
る
い
る
つ
る
か
る
し
る
ず
る
む
る
き
る
の
る
ふ
る
ね
る
い
る
つ
る
か
る
く
る
ち
る
る
る
こ
る
ん
る
く
る
り
る
の
る
ふ
る
ね
る
い
る
つ
る
か
る
く
る
ず
る
れ
る
る
え
る
い
る
え
る
ん
る
の
る
ふ
る
ね
る
し
る
ず
る
ま
る
ず
る
く
る
ち
る
ず
る
く
る
ず
る
れ
る
な
る
い
る
え
る
い
る
え
る
ん
る
の
る
ふ
る
ね
る
そ
る
れ
る
は
る
う
る
そ
る
し
る
ず
る
ま
る
な
る
い
る
ふ
る
ね
る
は
る
う
る
そ
る
く
る
ち
る
な
る
い
る
ふ
る
ね
る
は
る
う
る
そ
る
く
る
ず
る
れ
る
な
る
い
る
ふ
る
ね
る
は
る
う
る
そ
る
し
る
ず
る
ん
る
で
る
ね
る
む
る
つ
て
る
め
る
ぎ
る
め
る
て
る
ま
る
た
る
ね
る
む
る
る
ね
る
む
る
つ
て
る
め
る
ぎ
る
め
る
て
る
ま
る
た
る
ね
る
む
る
る
だ
る
か
る
ら
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
ふ
る
ね
る
は
る
う
る
そ
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
か
る
み
る
は
る
う
る
そ
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
き
る
ぎ
る
は
る
う
る
そ
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
こ
る
ん
る
く
る
り
る
は
る
う
る
そ
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
ま
る
ち
る
は
る
う
る
そ
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
こ
る
う
る
じ
よ
う
う
る
は
る
う
る
そ
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
あ
る
め
る
は
る
う
る
そ
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
こ
る
う
る
じ
よ
う
う
る
は
る
う
る
そ
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
は
る
な
る
は
る
な
る
は
る
う
る
そ
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
が
る
ら
る
す
る
は
る
う
る
そ
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
か
る
わ
る
は
る
う
る
そ
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
く
る
つ
る
は
る
う
る
そ
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
ね
る
こ
る
は
る
う
る
そ
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
な
る
べ
る
は
る
う
る
そ
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
か
る
せ
る
は
る
う
る
そ
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
あ
る
か
る
り
る
は
る
う
る
そ
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
し
る
こ
る
ろ
る
は
る
う
る
そ
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
と
る
け
る
い
る
は
る
う
る
そ
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
れ
る
い
る
ち
よ
う
う
る
る
い
る
は
る
う
る
そ
る
ね
る
む
る
ら
る
な
る
い
る
こ
る
ど
る
も
る
だ
る
け
る
が
る
ほ
る
ん
と
る
う
る

どこか異国の言葉に聞こえるといいかれど。

めるぎるめるてるまるたるねるむるるる
めるぎるめるてるまるたるねるむるるる
めるぎるめるてるまるたるねるむるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるる

呪文が歌のように聞こえ始めたころ、
男はようやく元の時間を取り戻す。

男 あのを、

マネキンがすりと筏から降りて食卓を作る。

マネキン おるかるえるりるなるさるいる。あるなるたる。

男 え。

マネキン おるかるえるりるなるさるいる。あるなるたる。

男は意味が分からないので、
もう1回、と指を立てて頼む。

おるかるえるりるなるさるいる。あるなるたる。
マネキンは何度も繰り返す。

男は分からずまたもう1回、と指を立てて頼む。
繰り返えされるもう1回。

おるかるえるりるなるさるいる。あるなるたる。

男は、マネキンの口調を繰り返してみる。

おるかるえるりるなるさるいる。あるなるたる。

自分の口に馴染むように、繰り返してみる。

おるかるえるりるなるさるいる。あるなるたる。
半笑いの男と意味不明を喋るマネキン。

まともに話している人間はどこにもいない。
船頭はじつと二人のやりとりを聞いている。

やがて、何度も聞いていると、

意味が分かってくる。

意味が分かってくると、

男は焦り始める。

マネキン はるやるくるごるはるんるたるべるちやるってる。

注意して聞くと、

はやくごはんたべちやって

と聞こえるのだ。

男 ころ、はるん……

マネキン するくるなるいるけるごる、がるまるんるしるてる。あるなるたる。

男 あるのる、

マネキン でるもる、おるいるしるいるよる。

つられてか、それとも慣れてきてなのか、

男の言葉にも変化が生まれ始める。

とても小さくだけど。

男 なるんるでる、ぼるくるはる、こるんるなる、しよくたく、

マネキン どのうるしるたるのる。

男 ぼるくるはる、しるかるめるるるるるるのる、じるぶるんるをる、さるがるしるに
る、きるたるのるにる、

マネキン るる、

男 え。

マネキン こるんるどるのる、おるやるするみる、どるこるかるいるくる？

男 あ、ああ、今度の休みね、

マネキン るる？

男 え。

マネキン いるまる、なるんるてるいるったる？

キンコン、とありふれたチャイム音が聞こえる。

船頭 私と話すんだから普通でいいしょ。

男 か、せい、こと、ば？

船頭 だってここは火星でしょ。

男 は。

船頭 間抜けた顔なのに何ニヤついてんのよ、外見りや分かるでしょ。

男、窓の外を見た。

真っ暗で何も見えない。

男 聞かないけど。

船頭 火星だから。

男 ねえさん、何言ってるの？

船頭 あんたがやりなおしたいって言ったから。前の嫁さん亡くしてからドツボだったでしょ。やり直しボタン連打するって言った時にはもう末期だと思って、環境替えるのが一番だし、でもこの子と再婚するとは思わなかったわ。火星育ちでしょ、それはいいんだけど、私に懐かないのが可愛くないのよね。

マネキんが紅茶を持ってやってくる。

船頭 堂々と言えるから通じないっていいよね。

しかし、雰囲気は通じてるようだ。

船頭 あ、空気って案外伝わるのね。

マネキんはこっそりと男に耳打ちをする。

マネキん まるさるかる、きよるうる、とるまるるるつるもるりる？ べるつとるはなるいるかるらるねる。ずるうるずるうるしるいる。

船頭 ちよつと、今それ悪口の空気流れた。小姑は丁重に扱っておいたほうが面倒は少ないのよ。

マネキん、なぜか箒をひっくり返えして壁に立てかける。

船頭 あ、なんでそんな京都の旧式的意思表示を知ってるのよ！

マネキンは、イイっと顔を歪めて船頭に見せ、
ひらりと部屋から姿を消す。

船頭 かわいくなーい。

男 姉さん。僕は、こんなやり直しをしたの？

船頭 前嫁は懐いてくれたのに、でもいい選択なんじゃない。今嫁は気に食わないけどね。

男 違うよ。こんな心機一転したかったんじゃない。ひとりでもいいんだ。笑わないあの頃に
戻りたいだけだったのに、これは、違う。

船頭 戻りたいってなんであんたはそう後ろ向きなの。進化しなさいよ。一歩進んだら戻
れないのよ。やり直しは効かない。

男 じゃあ何を選択し間違えたのかな。旅行に行かなきゃ良かった？ 出歩かなきゃ良か
った？ 出来なきゃ良かった？ ああ、それよりも、ハナから、

船頭 ストップ。暗いしうっとおしい。笑顔が暗さを倍増させてる。ナニナニしなきゃよ
かったを遡っていけば、あんたそのうち、車なんてなきゃよかったとか言いだすんだから。

男 それは言いがかり過ぎるよ、そんなこと言わない。ただ新しいやり直しの土地なんて
いらんないんだ。

船頭 進んでいつてるのよ。火星で暮らせる時代よ。ごらんよ。見えるでしょ。

船頭は双眼鏡を目にあてる。

船頭 人類が現れてからの地球を高速ビデオカメラで再生して見たら、いろんなところで
火花が上がるみたいに文明が生まれて消えてなくなつてまた火花が上がるみたいに見える
そうよ。PL花火大会なみにね。もう消えた星の光を地球から見ただはさすが、地球の終り
を火星から見ると、アウストラロピテクスは、思いもしなかったでしょうにね。誰か
が火星に行くんだって想像したから実現していくのよ。誰かが考えなきゃ電気ポットもロ
ケットも存在しない。車も船もバイクもビルも賃貸もキャバクラも想像の船に乗って未来
からやってきて過ぎて過去になつたらもう誰かの頭の中にしか残らない。歴史的資料なん
てそれこそ嘘っぱちよ。その時の、その国の、その誰かのための資料だもの。本当の歴史
はそれぞれの頭の中に独立する自分だけの国よ。

船頭には光る地球が見えているのだろうか。

男には、見えない。

船頭が、何かを歌った。

なつかしの鉄人28号の歌だ。

船頭 あるときは 正義の味方

あるときは 悪魔のてさき

いいも わるいいも リモコンしだい

船頭 手をにぎれ 正義の味方

たたきつぶせ 悪魔のてさき

敵にわたすな 大事なりモコン

船頭 悪魔の手先って誰？ 敵って、誰？ 見て。蛍みたいに青い光で包まれてる。あれ、チェレンコフ光って言っているのかな。あ、なんかまた赤く光った。見える？ あれ飛ばして光らせているのは、私やあんたかもしれないのね。

船頭は双眼鏡を外すと男を見た。

船頭 あんたも私も、遠くまで来ちゃってヒトゴトみたいに眺めてる。

あれ？

と、男は考え込んで言葉を詰まらせる。

男 姉さん。なんだかおかしい。

船頭 何よ。

男 最後に姉さんに会ったのは、いつだったっけ？

船頭 もうずいぶん前よ。

男 姉さんがラベル工場で、

船頭 その話はもういい。

男 工場長になったお祝いしたのは憶えてる。

船頭 もういいって言うてるでしょ。

男 正しい生産地をきちんと知らせるんだって。情報が行き届かないことが問題だからって、張り切ってた。でもそれからしばらくして、

船頭 今嫁、帰るわよ。お見送りしなさい。

男 入院して、それから、

ああ、そうだった。

と、思ったのか。

男は、手から玩具を落とした。

ゆっくりと歩く彼女は、
男が床に落とした玩具を、
それさえも、
永遠のようにゆっくりと。
ゆっくりと、
ボタンを押す。
流れるリズム。
幸せなら手をたたこうと、
流れるリズム。

船頭 思い込みで敬遠してるだけだから。

船頭 さばけないと困る人多いから。

船頭 安全なラベルじゃないと食べない人多いから。

船頭 ああ、でも。

船頭 私、スーパード敬遠してる。

船頭 ああ、でも。

船頭 中身は安全だから。

船頭 ああ、でも。

船頭 ああ、でも。

船頭 ああ、でも。

船頭の指は何かを操作する。
ラベルを貼る作業から、
プログラムの作業へ。
指だけが、動く。
それを真似るように、
マネキンが動く。
しかし船頭よりも正確に、
規則的に。
無数のマネキン。
延々と続くマネキン、

船頭 見えないから。

船頭 色あせるし。

船頭 見えないから。

船頭 過ぎていくし。

船頭 見えないから。

船頭 慣れていけるわ。

船頭 大丈夫。

船頭 もう誰も気にしてないから。

船頭 ねえ。

職場には返事がない。

船頭 返事するようにプログラムしなおそうかな。

船頭は、

せいさんちをかえるだけえらべるはだいじだからああ
あああああでもわたしすーぱーでけいえんしてるう
みえないからあすぎていくしいなれていけるわあああ
もうだれもきにしてないからああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああ

うろろうと、

うつろに、

歩き出す。

しかし指先だけは鋭敏に、

ラベルを貼る作業を繰り返す。

男は、船頭の、空を掻く指を見つめながら、

タオルから零れる笑いと言葉をとどめることが出来ない。

男 姉さん、姉さん、あるときは 正義の味方 あるときは 悪魔のてさき
いいも リモコンしだい

男の笑いの絶叫を、止めにやってくるのは今嫁のマネキン。

マネキン どううるしるたるのる。

男 姉さんが、いるんだ。

マネキン そるれるがる、どううるしるたるのる？

男 だって姉さんはもういない。いないんだ。だって姉さん、入院して、徘徊して、自分で責めて、うなされて、最後は、

男 最後は、最後は、

今嫁のマネキンに、さらにタオルを口にツッコまれて、

男はようやく大人しくなる。

男 死んだ姉さんが僕に会いに来た。

マネキン だるってる、あるなるたる。

男はマネキンを見た。

マネキン あるのるよるとる、こるのるよるはる、ぢるつるづるきるよる。

男 え……

今度はマネキンが軽薄なピンク色の筏を引っ張る。

いつのまにか、

船頭はその筏に乗っている。

ゆっくりと筏は進む。

男 これ、死んだ人間が乗れる船なのか？ 教えてくれないか。これはどこからやってきた船なのか。だったら、僕が君に、君に会えることだってあるはずだ。しかめつらの僕を探しに来たのに。アマゾンからこんなところまで来たのに。戻らないなら、戻せないなら、80センチのロンパース。君はそれを僕に見せて笑った。それは消せない。消えずに僕になかにずっとある。姉さん、どこから来たの。姉さん、

マネキン だるってる、あるなるたる。

マネキンが、なぜか畳の縁を持つ。
筏は畳の船でもあった。

男　なんで、畳み……？

マネキン　だるってる、あるなるたる。

マネキンは、畳みを引つpegす。

マネキン　だるってる、あるなるたる。

マネキン　あるのるよるとる、こるのるよるはる、ぢるつるづるきるよる。

男は笑いながら剥がされた畳の奥を覗く。
そこにあるのは、

男　恐山……？

マネキン　だるってる、あるなるたる。

マネキンの言葉は、やがて滑らかになっていく。

マネキン　あのよと、このよは、ぢつづきよ。

片言の、異国のような言葉から、
綺麗な日本語へと、移り変わっていく。

マネキン　丹波哲郎が言ったことは本当でした。こちらが今回世界遺産に登録されました、恐山のイタコでございます。畳を引つpegせば恐山があるのはテラヤマでございますましたがその流れも含まれての世界遺産でございます。ワタクシ、火星ホームタウンのジャパanky
ヤラクターマスユキが案内いたします。指先ご覧くださいませ。ワタクシなめらかに動
きます。こちらが今回世界遺産に登録されました、

マネキンが指し示す先に、

男 ……イタコ？

ギターを抱えたイタコがいる。

ゲンを弾いた。

じゃらんじゃらん。

イタコは歌う。

しあわせなら

と、軽快に歌う。

ギターと歌声の中、

ハクシヨン

ハクシヨン

ハクシヨン

フィクシヨン、

と、遠くであの掛け声が聞こえながら

軽薄なピンクの畳筏は消えていく。

ハックシヨン。

と、くしゃみをしたのはイタコであった。

イタコ 俺、あほやけどええか。

イタコは眼帯で右目を隠している。

男 イタコは、女性のはずですが。

イタコ 自分、今まで生イタコ見たことあるん？

男 ないです、けど。

イタコ ほななんで決めつけんの。

男 だって、

イタコ 何笑とんねん。

男 ギターも、違うと思います。

イタコ 楽器は必需品やねん。

男 しかもなんでその曲なんですか。

イタコ この歌しか知らん。他の曲ひかれへん。俺の生まれた年の歌や。九ちゃんの歌や。

あ、またオリンピックくるんか。

男 関西弁なのは、おかしい。イタコは東北の、

イタコ 絶滅したわ。修行厳しいからな。最後のイタコも、もうおらんくなった。でも、いるやろ。

男 え。

イタコ にいちゃんみたいなん、いっぱいおるからな。いるねん。イタコは。だから俺、本読んで修行した。

男 本!?

イタコ 誰もおらんから弟子入りできんかったんや。消えてくんなンでも。でも本読んだ。俺半分は見えへんから。これ天職や。おれは七人兄弟の一番末っ子で、頭悪いねん。だから歌で歌わな覚えられへん。不思議やけど歌やったら覚えられるねんなあ。にいちゃん、誰に何を届けたいんや。

男 届け、られるんですか。あなたは。例えばもうここにいない人に、僕の言葉を届けられるんですか。

イタコ 口寄せな。

男 いや、信じてるわけじゃないけど、

イタコ ほらでた。

男 僕は現実的なんです。

イタコ 俺、半々やねん。

男 え。

イタコ 頭が。半半。こっちで見たら、

イタコは隠していないほうの目のことを言う。

イタコ 俺、こっちでは半人前で、今度こっちで見たら、

イタコは隠しているほうの目のことを言う。

イタコ こっちでも半人前。両方の目で見たらごちゃまぜになるんや。だから俺あほや言われるねん。

男は、イタコの言うことが全く理解が出来ないので、あほやということを理解する。

イタコ これ触れるやろ。

と、イタコは男の体に触れる。

イタコ みんな見えへんもん信じひん。そやけど、見えたからって信じるとは限らんやろ。どうせ見たいもんしか見ひん。つきつけられても知らん顔する。それ、見えてへんのと
同じや。

男、イタコを見た。

男 え、だから？

イタコ だから！ 現実的で信じひんって言うてもやで、にいちゃん。

イタコ、ギターをかき鳴らした。

イタコ 想像したらもうあるねん。

男は、ぐっとタオルを噛んだ。

男 そんなこと嫌ってほど分かってます。それを消したくてこんなところまでやって来たんです。アマゾンから恐山まで。色あせず消えず流れてしまわない風景はいつだってある。

イタコはギターを弾くのだ。

男 君が80センチのロンパースを僕に見せて笑う。そこらへんに転がった玩具をひとつずつ触って確かめて、そしたら想像のあの子が向こうからぼてぼて歩いてまるっこい指先で君に掴まるんだ。まだ喋らない。声たてて笑うだけ。どうせこれがいつまでも消えないなら、君が本当に火星にでも行って暮らしていると想像を飛ばすよ。僕は単身赴任で遠距離で、君とあの子が、ただ違う場所で、変わらず笑って暮らしていればいい。朝起きて、パンを焼いて、冷蔵庫を開けて、ヨーグルトでも食べて、午前中に洗濯機が回る。天気がいから、昼寝もするかもしれない。おやつは何だろう。食べ過ぎてお腹を壊す。買い物はちよつとそこまで。にわか雨が来たら、走って家に帰って、少し早めにお風呂に入るんだ。出来ればシチューがいい。片付けを手伝えなくごめん。夜更かしはしないほうがいいな。大きくなれないだろうから。また明日。明日は何して遊ぼうか。また明日。朝が待ち遠しいんだ。そんなふうに、当たり前前に、どこか遠い違う場所で暮らしているなら、

男の想像の毎日が、

口から零れる。

零れた言葉を、

イタコは歌に乗せて歌うのだ。

しあわせなら手をたたこう

そのメロディに乗せて。

♪ 幸せなら手をたたこう

幸せならおはよう

幸せなら歯磨こう、

幸せなら顔洗おう

幸せならパン食べよう

幸せなら洗濯しよう

幸せなら飛び跳ねよう

幸せならお買い物

幸せならけんけんぱ

幸せなら鬼ごっこ

幸せならお腹いっぱい

幸せならイチニイチニ

幸せなら歩くんだけ

幸せならお昼寝しよう

幸せならロンパース

幸せならお風呂だよ

幸せならベッドへGO

幸せならおやすみよ

幸せならまた明日

幸せなら、

教えてくれないか

男 そんな死の向こう側が本当にあるのなら、いくらでも想像してやりますよ。それなら、僕だって当たり前のように笑える。

イタコ、今度は左目を隠してみた。

男の姿は急激に霞んで、

その代わりに、

永遠のように歩いていた女が、

妙にハッキリと見える。

赤色のランプ。

明滅して。

女の顔。

聞。

女の顔。

聞。

女の顔。

聞。

明滅。

霞んでしまった男は、

数人の影に担がれるようにして、

ベッドに横たわる。

明滅する赤と闇のなか、

ひらりと白いシートがベッドにかけられる。

聞こえるのは、ギターの音。

しあわせなら手をたたこう

が、

やけに激しいギターの調べ。

イタコの演奏が終わると、

静寂。

イタコは今度は左目を隠して、右目で女を見ている。

女は両腕に玩具や絵本やロンパースを抱えたまま、

そっと白いシートをめくった。

そこに笑う男の顔を見た。

女 だからあなたは笑ったままなのね。

女は男の笑った頬に触れてみた。

女 冷たい。

女 冷たい。

女 冷たい。

イタコはじっと女を見る。
と、やがて。

イタコ あ。こっちが生身か。

イタコはどっちがどっちなのか、やっと分かったようだ。
その時、
ドン。

花火のような音がした。

女とイタコは顔をあげる。

ドン。

ドン。

ドン。

しばらく、見つめ続けた。

イタコ あい、かわらず、やなあ。

イタコはドンと音がする方を見つめ、

女 かわらず、

女は笑ったままの男を見つめる。

ドンと響く音のことをイタコは、

イタコ かわらずや。

と言い、女は男の顔をのこことを、

女 変わらずに、

と言う。

女 変わらずに笑うから、

女は笑っていいのか、泣いていいのか、分からないのだ。
そんな女をイタコは見ていたが、仕事はもう終わっているので
帰ろうとする。

イタコ ほな。

イタコ 届けた、

届けたで、というイタコの言葉は連発される爆音にかき消される。
さてそれが戦争の音なのか、
あるいは原子力発電の爆発の音なのかは分からない。
それが日常であることは、間違いがない。
轟音の日常の中、
女はお腹を抱えるように守りながら、
ポケットから小さな新聞の切り抜きを取り出してイタコに渡す。
イタコは手に取る。
見る。
女が何か言った。
聞こえるだろうか。
聞こえないだろうか。

女 こんなに小さい。こんな200字の文字の中に入るほど小さいんです。

残音が響いて、ほんの少しの静寂がやってくる。
あるいは、
遠ざかっていくのかもしれない。
イタコの声は、かき消されることなく。

イタコ 小さい、でかいて、あるんか。

女は答えずに、イタコの手から新聞の切り抜きを取る。

女 騒がしい。

女は窓の外を見た。

女 そんな慌てなくても、

誰に言うともなく。

女 いつかは死んでしまうのに。

女はイタコに頭を下げて、
笑う男が眠っているベッドをゆつくりと押す。
イタコはじっと女を見て、

イタコ あ。

女 はい？

女が振り向く。

イタコ あんた、手、叩ける？

女は男の遺体を見る。
そして、手を置いた自分の腹を見る。
遠くで連発する音に耳を傾ける。

女 そんな死の、向こう側があるなら。

女はもう一度頭を下げて、ベッドを押し進めて行った。
イタコだけが、ひとり残された。

イタコ どうせ見たいもんしか見いひん。つきつけられても知らん顔する。

ドン。

また大きな音が聞こえた。

イタコ 想像したら、

イタコは眼帯をそつと外してみる。
両方の目で見ろ。

イタコ もうあるねん。

ドン。

また大きな音が聞こえた。

ドン。

ドン。

ドン。

イタコはどかりと座り込み、
ギターを弾き始める。
始まりと同じようにハミングで。
しあわせなら手をたたこうのリズム。

やがてギターの調子が出て来たのか、
ハミングから口ずさみ、
歌になり、
大声になっていく。

イタコ以外の登場人物たちは、役から解除され、
舞台上にあるものを全て片付けていく。
転がった玩具やら、
笑う男が寝転がっていたベッドやら、
シートなんて丁寧に畳んだりして。

イタコが、幸せならと歌う間に何もかもがなくなっていく。
その間に、
歌うイタコの傍を電車が通り過ぎ、
人々が通り過ぎ、
行進する軍隊やデモが通り過ぎ、
オリンピックが過ぎ、
砲弾が過ぎていく。
人々が思う歴史が通り過ぎて行く。

やがて。

映画の終りのように、
なにも映らない空白が通り過ぎる。
通り過ぎ続ける。

あるんだかないんだか分からない空白。

イタコはふと気がついて顔をあげる。

イタコが座るその場所にはもう何も無い。

イタコ 何や……もう誰もなんもなくなってもたんか。

歌っている間に、なにかもが通り過ぎて行ったことを知る。

イタコ そうか。なんもなくなってもたか。

イタコは遠く遠くにある光るものをだけを見た。

イタコ ああ。

なくならないものがあつたみたいだ。

イタコ 星だけがまだおるわ。

空を見た。

そして、左目を隠す眼帯を着ける。

大きく息を吸う。

まるで歌い出すみたいに。

前奏のギターを大きくかき鳴らして、

イタコはひたすら歌うのだろう。

しあわせなら、
と。

その歌声は闇にかき消される。

おしまい